研究情報 2

牛のエサにする飼料稲新品種「べこあおば」

水田利用部　稲育種研究室
中込弘二
NAKAGOMI,Koji

現在，米の生産は過剰傾向にあり水田では転作が求められています。一方で，牛のエサにする飼料はほとんどを海外からの輸入に頼っており，国内産の安全な自給飼料の増産が重要な課題となっています。その中で，水田で飼料を生産する飼料稲は，飼料自給率を向上できる転作作物として注目されています。

現在までに育成されてきた飼料稲専用品種は，東北地域では晩生のものが多く，東北地域に適した品種は多くありませんでした。今回，東北地域で飼料稲の栽培を促進するため，東北地域に適した飼料稲専用品種「べこあおば」を育成しました。

《「べこあおば」の来歴》

「べこあおば」は，大粒で多収の「オオチカラ」と多収の「西海203号」とを交配し育成された品種です。「牛」を表す東北地方の方言“べこ”を名前につけ，東北の“べこ”が好んで食べ，東北地域で広く普及することを願って名前を付けました。

《「べこあおば」の特徴》

「べこあおば」の稈長は，「ふくひびき」よりやや短い短稈です。穂数は「ふくひびき」よりやや少なく穂重型の草型で，葉が直立し草姿は良好です（写真１）。稈は太くて強く，耐倒伏性に優れます。脱粒性は“難”です。

出穂期は，「ふくひびき」よりやや遅く東北中南部において“中生の晩”に属するうるち種です。成熟期における玄米収量は「ふくひびき」よりも明らかに多収です。玄米千粒重は約30gで極大粒であり，一般品種との識別性があります（写真2）。飼料稲の収穫に適した黄熟期での茎葉を含めた乾物収量は，「ふくひびき」よりも１割程度多収です。直播栽培において，耐倒伏性は「ふくひびき」より明らかに優れ，ほとんど倒伏しないことから直播栽培に適しています。

写真1：直播栽培での「べこあおば」の草姿　直播栽培でも倒れない

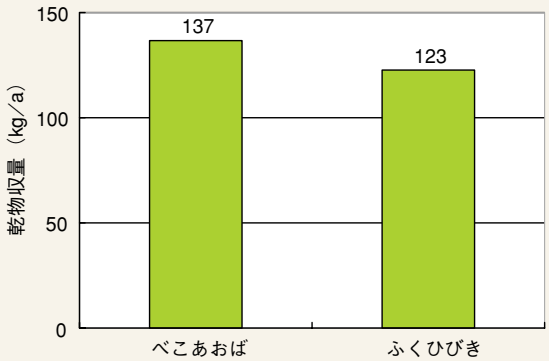
写真2：「べこあおば」の籾と玄米

《資源循環型農業を目指して》

飼料稲は，水田と畜産を飼料と家畜ふん堆肥でつなげる資源循環型農業の点からも注目されています。「べこあおば」は家畜ふん堆肥を多量に施用した極多肥条件においても倒伏せず，収量が増えます。そのことから「べこあおば」は家畜ふん堆肥を利用した多肥栽培に適しており，このような循環型農業に適した品種といえます。

今後，「べこあおば」が東北地域で広く普及し，安全な自給飼料がたくさん生産されるとともに，資源循環型農業が普及することを期待します。

さらに詳しい情報は東北農業研究センター水田利用部のホームページ（http://tohoku.naro.affrc.go.jp/omg/）をご覧ください。



図：「べこあおば」の収量性
（秋田県大仙市、2002～2004年平均）